

「泣き叫んだり、

歯がみしたりしない」ために

上野直蔵

鬼が忘れた打出の小槌、これで一寸法師は自分の背丈をうち出し、りりしい偉丈夫となった、ということがありますが、この打出の小槌というのは自分の欲しいものを祈念してうちふると、ぞくぞくとそれが出てくるというものです。もしも打出の小槌があったら……。少年時代にそんな空想にふけたことがあります。欲しいものをなんでも考えて思いのままの栄耀栄華。打出の小槌から携帯用の打出の小槌を出して、いつにても思いついた時に欲しいものを入手する。ところが、一寸法師君はどうやら、打出の小槌を使ったのは自分の上背をうち出した時の一度こっきりらしいのです。出世はいたしましたが、それは小槌を乱用して立身出世をうち出したのではなく、あとは自

分の努力で身をたてていった形跡があります。

この打出の小槌という発想は人間生活にとってなにか象徴的な意味をもっているように思えます。欲しいものをどんどんうち出す人間の頭脳、欲しいものを限りなく発想する人間の欲望。産業革命以来人間はそんな欲望を単に夢として温存しておかないで、どんどんつくり出してきました。遠いところに住んでいる人と話ができる機械。二本の脚を使わなくても遠隔地に短時間で到達できる道具。そう、空を飛ぶことも実現しました。離れたところの出来事を同時に目でとらえることも工夫しました。月の世界にもお伽噺の中ではなく現実に出かけるようになりました。そしてそれなりに人間生活の便利さに貢献してきました。と同時に、結果をじっと待つという忍耐力や、その結果をあれこれ思索してみせる想像力というものの活用範囲をせばめてきたことも確かです。しかし、効率を尊ばなければならぬ仕事に、てんめんなる情緒や、不安な忍耐に身をゆだねているわけにもまいりません。新幹線に情緒がないといわれますが、それは当然のことでありましょう。

所用で福岡にまいりました。新幹線を使用しました。トンネル、トンネルの連続で、結局博多駅に着いた時は、長い地下鉄道からおりたつた実感がありました。昔の山陽道は楽しかったものです。山脈あり海岸線ありで、まさに変る景色のおもしろさでした。一言でいえば、かつては同じ所用で、もちろん効率をねらった旅行でも、人間的な楽しさが附随したものです。今は効率は効率で、そこには人間的雰囲気は入りこませない。楽しみは楽しみでそこぬげにどんちゃん騒ぎという

ことで、どうも、楽しみの中にも節度を、実務遂行の中にも楽しみを、といった生活全体の中での人間らしさはなくなってきたようです。そこで、人間らしい生活は人間が楽しみ、まったくの事務は代理人にやらせようという発想が生れてくるわけです。いわゆるロボットの発明ということになりましょうか。手近にあるオックスフォードのコンサイス英語辞典をひいてみますと、ロボットというのは、「外見人間の形をした自動操縦器」とありまして、「知的かつ従順だが個性を欠いた機械」とつづけています。従順、というのは人間の意志に従順、ということでしょうか。「外見は人間の」というところなどはまだ古い時代のロボットを思い出させます。面白いのは「機械のような人間」という意味もあるのです。「人間のような機械」がロボットであったものが、ロボットが感情も個性もこめずに仕事をするので、逆にそういう人間をロボットと称するようになったのです。この機械のような人間、ロボットのよう人間というのは、公私にわたって人間的感情を働かせない人のことを言うわけです。

ながながと卒業式とは関係のないお話をいたしましたでしたが、最近各企業がこのロボットを職場に導入するようになった、ということをしきりに耳にするようになったからです。そういう大なり小なりオートメーション化された職場へ、これから大部分の卒業生諸君は社会人として進出されるわけです。なんとなく不安でうす気味悪い気持ちを押えきれません。このような機械の進出によって人間の勤労の価値や意義はどうなるのだろうか、と思うからです。遊びの時だけ人間は人間らしさをとり戻すのではない。労働の最中でも人間は人間らしくふるまわねばならないのです。ロボットの導

入は単なる雇用の問題だけでなく、人間の生き方の問題としても考えねばならないと思います。人間が知能を傾けてする仕事や、生きている存在証明を求めてする勤労を、ロボットに代行させるわけですが、結局人間は、打出の小槌をふるって人間の仕事を代行し、人間の命令に従順な機械をうち出してはみたものの、その機械が人間を窓際に押しやって、ますます人間の疎外感がつのることになります。こうなりますと、従順であつたはずのロボットがとんでもない復讐を人間にしたこととなります。

人間には神から与えられたタレントがあります。このタレントというのは、才能ということですが、そもそも昔のヘブライの貨幣単位だったので。新約聖書の『マタイによる福音書』の第二十章、十四節以下にこんなエピソードがあります。一人の主人がその僕にその能力に応じて五タララント、二タラント、一タラントをあげて出張をしたのです。この三人のうち二人はそれぞれあづけられた金銭のたかに応じて働きそれぞれ同額の金をもうけたのです。ところが一タラントしかあづけなかった者は不平たらだらで、金を地中にうずめておいて主人が帰ってきた時にそのままつり返したといいます。他の二人については主人はほめてとらせたのですが、最後の僕には怒りました。そして外に放り出したのです。その時の主人の科白が「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまで取り上げられるであろう」というのです。人間の人間らしい働きは神に与えられた能力に応じて神に^{こた}応えることにあります。そこに労働や勤労のよろこびがあります。持っている人はいよいよ豊かになるべきでありますが、そ

れをロボットにとりあげられて何も持たなくなれば、どういうことになるのでしょうか。ロボット化、機械化の怖ろしさは、そういう人間性喪失というところにあるのです。ロボットはまさに打出の小槌です。しかしその打出の小槌によって得た満足は、人間にとって自己形成の機会や場がはずされる。という犠牲のうえになりたっていることになります。

好むと好まざるとにかかわらず諸君はそういう社会の只中に身をおくことになります。それはどうにもならない現実ですが、いつにても自分には神から与えられたタラントがある、ということをお忘れなくください。そのタラントを行使しえなかった僕が外に放り出されてどうしたのでしょうか。聖書はこう記しています。「彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたり」したそうです。

鬼の忘れた打出の小槌であるがゆえに、諸君はそれを有効に使いましょ。人間が人間たることを自覚できる範囲で使いましょ。無暗に使うと、そもそも鬼のものであったがゆえに、それに使われることになり、神のお召しにそむくことになりましょ。そしていたずらに「泣き叫んだり、歯がみする」ことになるでしょう。そういう意味で『お伽草子』の一寸法師君は賢明でした。

ご静聴を感謝します。

(同志社総長)

神の備えたまう道

松山義則

青年、新島襄にとって、幕末、わが国の状況はまことに希望のない暗澹たるものでありました。わが国の将来を憂い、日本に近代化をもたらす以外に道はなく、そのためには西欧の事情、その精神、学問、思想を学びとり、よってわが国の発展に資すべきであると考えました。元治元年夏、新島は意を決し、国禁をおかし、国を脱出したのであります。新島は意志の人であり、行動の人でありました。夜半、幕吏の監視をのがれて米国貨物船に搭じ、苦役に服して一年間洋上を旅し、ボストン港に到着しました。伊藤俊輔、井上聞多、西周などのように藩命を受け、あるいは幕命を受け、あるいは幕命による留學生として資金を十分に持ち、海外に知己あるものではありませんでした。懷中無一物、たよるすべもなく、ボストン埠頭に上陸したときにはなお船内の労働に服して口に糊し、異国に消えゆく亡命者でありました。ただ心には、この西洋社会において勉学の志を達し

たいという願いに燃えていました。しかし同時にそれを実現しうるかどうかについてまことに大きな不安と焦躁にかられたことであつたでしょう。当時アメリカは南北戦争の直後であり、リンカーンは暗殺され物価は高騰するという不安定な社会状況でもありました。言葉は不自由、地理は不案内のなかで、悲痛な気持と不安にうちひしがれつつなお希望と願望と意志を守りつづけたのであります。そしてその労役に服していた船の船主ハーディ氏の目にとまるところとなりました。自分の意思をたどらしい英文にしたためた誠意あふれる文章がみとめられたのであります。

われわれ人間は不安定であり、有限でありまた終り有るものであります。しかも現代の社会はあまりにも固定化し機械化し、過度に情報の氾濫する無責任な社会でもあります。情報の誤りや汚染は社会を混乱させ、過度な緊張をひきおこしています。そのなかにあつて正確に事実を把握し、批判的に真実を判断していくことは容易ではありません。しかも、さらに視覚的、聴覚的あるいは触覚的な感覚化がすすみ、すべてを直接に感覚だけにゆだねようとする時代でもあります。われわれはこのような時代、社会に生活しています。情報は機械化され、単一化され、量化され、一方的に価値づけされ、人々はこれにひきずられていきます。

このような社会にあつて、われわれはものごとを自らの目で正しく把握し判断するという理性的勇敢さを堅持しなければならぬでしょう。現代は理性的であることをおろかしとして、感性的直観に訴えることがかしくさきに通じるという気風さえみられます。たしかに論理の堂々めぐりはさえるところでなく、直観的なものごとの読みとりにはたくみさがみられます。しかしわれわれはこの物質化した多様な豊かさを目標とする社会において、生きることの意義をつねに問い求め、情報や感覚に流されることなく、叡智をもって勇敢に生きる以外にないと思ひます。

諸君がこれから旅行かれる社会とその人生には競争があり戦いがあります。その戦いの前線において、任務を放棄することなく責任を果すたくましい人物として成長されるであります。しかし、競争には協力が、戦いには平和がなければなりません。たくましい勇氣ある人物とは、自己のために争い、戦うのではなく、大いなるもののために生き自らをささげることでありましょう。

人間は動物であり、自己保存的な機序を本来的にそなえた存在であります。しかし同時に社会に生き協調し協力して他者のために考える存在でもあります。忍耐と努力、ものごとを正面からとりくむ勇氣、人に依存せず、自らの手と足で働く、自由、自立の人でありたいと思えます。このきびしい情報化社会、欲望と感覚の環境、競争と猜疑にあふれた生活のなかで、有限の不安な弱い人間であることを自覚しながらたくましく責任を果して生きねばなりません。聖書はつぎのように記しています。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」

卒業生諸君が、生命を賭して真理のために生きた勇氣ある新島先生の生涯に学び、明るく、余裕ある人生を送って下さるよう願っています。われわれ人間にはひとりひとり、この世界において果すべき役割があるからであります。自分の人生は神の用意されたものであると信じるころに希望とよろこびと明るさが生れるであります。神の備えたまう道を歩みつけたいと思います。

(同志社大学長)

変らざるもの

岡野久二

現代社会は年毎に激しく変化しています。政治・経済はもとより、社会生活のあらゆる面の変動の急激さにはただただ驚かされるばかりです。円相場の上下や衣服の流行がその象徴的なものと言えるでしょう。その変化の中心をなしているのは機械文明の進歩であります。十八世紀にイギリスで始まった産業革命が全世界の機械工業の進化をもたらし、産業の発展に寄与したことは周知の事実であります。二十世紀に入ってから、その進歩の度合が益々早くなって今日に至っています。特に現代はハイテク、つまり高度技術社会となっており、産業や社会生活の変化に科学技術が大きな役割を占めています。その科学技術の主要部分となっているのはエネルギーやエレクトロニクスの分野であり、原子力発電、ロボット、コンピューター、オフィスオートメーションなどの最先端技術を見ていると、いやが応でも訪れてくる「近未来」の科学時代に備えて、従来の思考方法を頭ごと取っ換えねばならない気がいたします。つまり、現代のイノベーション（技術革新）は

人間の想像力を超えて、人間社会を改革していると言えます。たとえば、最近のロボット技術の進歩はまことに目を見張るものがあります。生産工業の全工程がロボット化される日も間近いのではないでしょうか。あるいは、運搬の無人化ということも夢ではなくなっています。このような科学技術の進歩は、過去十年、百年のそれに匹敵するものが、現在では一年で達成されるといっても過言ではありません。

現代社会のこの急激な変化に対して私たちは手をこまねていることは許されません。その変化に対応して、頭を使い、創意工夫することが人間の役目になってきています。科学技術が進むにつれて、人間の独創性や創造性が一層重要になります。科学技術がどんなに進歩発展しようとも、技術の独り歩きはあり得ないことであり、その基本には常に人間の力が存在しています。そして、最も重要なことは、高度の科学技術の進歩の中で、人間の精神面の向上を計ることです。どんなに精密なロボットが完成されたとしても、それはあくまで人工の僕しもべでありますから、それをうまく利用することが出来るように、人間自身が切磋琢磨せつたくましていくことがこれからの時代には必要であります。今まで以上に、人間の知性、人間の道徳が貴重になります。

また、反面では、どんなに激動の時代にあっても、変化してはならないものもあります。人の世には変化と不動の両面がいつも存在しています。この二面性は大学教育にも当てはめることが出来ます。社会の変化に対応して、教育・研究の内容や設備の充実を計ることは高等教育機関としての大学の使命であります。同時に、常に変ることなく堅持していかなくてはならないものもあります。それは建学の精神、教育方針であります。同志社学園がキリスト教主義を基本とした教育方針を放棄すれば、同志社の存在理由はなくなります。校祖新島襄はかつて政府の補助金を受けんがた

めに、時の文相森有體氏に面会した時に、同志社が「キリスト教主義の教育」を教育綱領から削除すれば、補助金問題は容易に解決すると言われましたが、新島は毅然とした態度で、「私は真正なるキリスト教主義をもって国家のため一身を捧げ、青年子弟の教育に終始せんとするものですから、之を削除してまで補助を受けることを欲しません。又この主義を除いては、断じて同志社の存立も望まないものです」ときっぱり答えています。それでこの補助金問題はその後沙汰済みとなりました。同志社は創立以来百数年の間、幾多の迫害、弾圧を受けながらも、キリスト教主義を奉じて、「良心の全身に充滿した」人物養成のために努力してきました。この建学精神は同志社が存続する限り未来永劫変えることはありません。

建学の精神と同様に、人生において不変のものは人間の愛の心であります。人間の純粋な愛情は時の経過によって変化するものではありません。四百年前に書かれたシェクスピアの諸作品が現代人の心を打つのは、彼の作品の中に脈々として流れている人間感情の機微や深い愛情が現代人にアッピールする力をもっているからであります。さらに遡さかのぼって、二千年前に示された救世主イエスの愛は今も変ることなく、人の世の光となっています。国家・民族を超越したイエスの愛は永久に存続することでしょう。聖書には、「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つであります。このうちで最も大きいなるものは、愛である」(コリント人への第一の手紙 十三・十三)とあります。このうちで最も大きいなるものは、愛である。この不変の愛を認識することは大切であります。

同志社で学び、今春巣立っていかれるみなさんが、激動する世の中で、時代の波に押し流されることなく、時代に直面し、自己の知性を磨き、不変の愛に目覚め、雄々しく来るべき二十一世紀へ向って歩を進められるよう祈っています。

(同志社女子大学長)